PQ07 Express ―学生セクションを中心に―

堀田充規

■はじめに

4年毎に開催されるプラハ・カドリエンナーレ（以下PQ）学生セクションに舞台芸術学科舞台美術コースが出展するようになって13年を経た。筆者も2007年に3度目となるPQを体験したが、PQ07出展に際しては日本舞台美術家協会PQ実行委員として、開催2年前の準備段階から参加できた。

51カ国550人以上のアーティストが展覧会に参加し、500近いライヴイベントを開催、世界70カ国から35000人が来場したと発表された。舞台美術のオリンピックとも言われているが、期間中80ものワークショップに1500人の学生達が参加し、展覧会はもちろんパフォーマンス発表など多岐にわたった。元来舞台美術家を中心とした展覧会から始まったPQだが、今では舞台芸術に関わるあらゆるジャンルから参加があり、舞台芸術の祭典といったところだ。プラハの街角のあちらこちらに興味深いパフォーマンスが繰り広げられた。

Krizik Pavilion での学生セクション配置図

1999年のPQ学生セクションでは30カ国110校が参加。2003年は36カ国124校＋αが参加したが、2007年はインターネット上の発表では41カ国158校となりPQ史上最大規模となったために、学生セクションは展覧会場である産業宮殿の建物に納まらず、産業宮殿裏手のKrizik Pavilion Eでの展示となった。

今回は学生セクションを中心に過去のPQとの比較考察し、詳しくレポートしたい。

◆概要

展覧会はナショナルセクション、劇場建築と技術セクション、学生セクションの3部門から構成される。今回は全てのセクションにおいて、コンペティションが行われた。（前回、学生セクションはノンコンペ）審査委員は世界各地から選抜された11名で、日本の松井るみさんや前回最優秀賞のゴールデントリガーを受賞した、リチャード・ハドソン氏らがいた。

組織　チェコ共和国文化省　　劇場協会
　　ディレクター /OndřejČerný
　　ジェネラルコミッショナー /Arnold Aronson
　　（アメリカ・コロンビア大学教授）
後援　チェコ共和国大統領Mr. Václav Klaus
　　プラハ市長Mr. PavelBém

◆開催期間2007年6月14日～24日

前回は16日間の開催、前々回は20日間であった事に比べると、毎回参加国が増えているにも関わらず、開催期間は随分と短くなった。だが、プログラムは盛り沢山で、パフォーマンスやワークショップと毎日

目白押しだ。1999年に初めてPQを体験した時は、現地に行くまでそのスケールや展覧会そのものの他にパフォーマンスなどの多数の情報を得る事が出来ず、プラハで初めて手にしたプログラムの多さに驚かされた記憶が残っている。しかし、PQ07では前回以上にあらゆる情報がインターネット化され、リアルタイムでニュースを得て、渡航する前には多くの情報を入手した上で参加できた。我々日本舞台美術家協会PQ委員会でも島川とおる氏がキュレーターとなって、全てメールやインターネットでの情報交換をした上で、東京都内で2ヶ月毎の会議を開き、今までに無い開かれたPQ実行委員会となった。

以下はそのPQ07プログラムだ。

◇ Performances on the Streets
◇Discussions / Lectures
◇ PQ Forum and Discussions
◇Days of countries and regions
◇Second Hand Fashion Shows
◇Scenofest for the Public
◇Performances in the Industrial Palace
◇ Live Events in the Exhibitions
◇PQ at the Archa Theatre
◇ Accompanying Exhibitions
◇International Conferences
◇ Prague Theatre Days
◇Excursions to Prague Theatres
◇ Scenofest
◇ Bookbrunch

このプログラムを見てわかるように、これはまさに舞台美術を中心とした世界大会の学会と言ってよいだろう。それ故に、世界の演劇上演の情報を入手するために、毎回参加者や学生達の来場者が増加している。

■参加国と参加セクション

PQ07では展示テーマは各国キュレーターに任せられ、学生セクションと共通テーマで取り組んでいる国も多数見られたが、特にテーマを記載していない参加国もあった。参加セクションと出展者数、参加校数と各国のテーマは以下である。（以下セクション省略）

◆ アルゼンチン　ナショナル/12名
テーマ[The Stage set: The times of its history]

◆ オーストラリア　ナショナル&学生/1名と1校
ナショナルテーマ[Brian Thomson-30years Setting the Agenda]　学生テーマ[Penumbra]

◆ ベルギー　ナショナル&学生/6名と6校
ナショナルテーマ[Interaction]　学生テーマ[Junctions]

◆ ベラルーシ　ナショナル&学生/12名と1校
ナショナル、学生テーマ共通
[The Land Under White Wings]

◆ ブラジル　ナショナル&学生&建築と技術/
1名と6校と1名/ナショナル、学生テーマ共通[Nelson Rodrigues' Universe and Dramatic Work]

◆ ブルガリア　ナショナル&学生/12名と1校
ナショナルテーマ[The Machine]
学生テーマ[Step by Step]

◆ チェコ　ナショナル&学生&建築と技術/10名と10校と2名　ナショナルテーマ[Entresort or Enterleave]

◆ 中国　ナショナル&学生/8名と6校
ナショナルテーマ [The End and Rebirth of Tradition in Chinese Scenography]

◆ デンマーク　ナショナル&学生/2名と2校
ナショナルテーマ[“The Copenhagen Ring”at the Royal Danish Theatre]

◆ エジプト　ナショナル&学生&建築と技術/1名と2校と2名　ナショナルテーマ[Uncle Nageeb's Lane]
学生テーマ[Class projects of scene design]

◆ エストニア　ナショナル&学生/1名と1校
ナショナルテーマ[Jarry's King Ubu at the abandoned military airfield2006]　学生テーマ[Reanimography]

◆ フィリピン　学生/1校　テーマ[Theatre Education]

◆ フィンランド　ナショナル&学生/14名と1校
ナショナルテーマ[Arctic Light]　学生テーマ[Forest]
◆ グルジア　学生/2校
テーマ[Auditoriun N15-Always at the Edge]
◆ 香港S.A.R.中国ナショナル&学生/5名と1校
ナショナルテーマ[Economical ＋Beautiful ＋Fast =Sublime?]　学生テーマ[Life at the Hong Kong Academy for Perfoming Arts]
◆ チリ　ナショナル&学生/1名と1校
ナショナルテーマ[Chile in Progress]
学生テーマ[Reversible]
◆ クロアチア　ナショナル/10名
テーマ[Ludicrous,Ludicrously...Ludism?]
◆ アイルランド　ナショナル&学生&建築と技術/18名と8校と5名　ナショナルテーマ[Firing The Canon: Masterworks revisited in modern Ireland]
学生テーマ[Crosscurrents]
◆ アイスランド　ナショナル/1名
テーマ[The Importance of Being...]
◆ イタリア　学生/1校
◆ イスラエル　ナショナル&学生&建築と技術/17名と5校と1名　ナショナルテーマ[Reaching Through the Looking Glass Looking Over the Wall]
◆ 日本　ナショナル&学生/12名と4校
ナショナル、学生テーマ共通
[“Kawaii” Scenography as Vernacular Pop]
◆ 南アフリカ　ナショナル/6名　テーマ [Reshaping the Box]
◆ カメルーン　ナショナル/1名　テーマ[Scenography in Theatre for Children and Young People in Cameroon]
◆ カナダ　ナショナル&学生&建築と技術/9名と12校と3名
ナショナルテーマ[Inprints of Process]
◆ 韓国　ナショナル&学生／10名と4校
ナショナルテーマ[In the middle of a long Journey searching for Koreanness]
学生テーマ　[Aristophanes' The Birds]
◆ キュプロス　ナショナル/9名　テーマ　[Theta]
◆ リトアニア　ナショナル&学生&建築と技術/13名と1校と2名　ナショナル、学生テーマ共通
[The Ever-chaging Landscapes of Theatre]
◆ ラトビア　ナショナル&学生/1名と1校
ナショナルテーマ[Monika Pormale]
学生テーマ[Let's Play Bulgakov!]
◆ ハンガリー　ナショナル&学生&建築と技術/5名と1校と1名　ナショナルテーマ[Lilion in Baghdad]
学生テーマ[Romeo and Juliet in Bagdad]
◆ メキシコ　ナショナル&学生&建築と技術/12名と1校と1名　ナショナルテーマ[De Chile,deDulce y d Manteca]
◆ ドイツ　ナショナル&学生&建築と技術/3名と3校と1名　ナショナルテーマ[New Spaces for the Classic]
学生テーマ[Joint exhibition]
◆ オランダ　ナショナル&学生&建築と技術/10名と4校と4劇場　ナショナルテーマ[The soul of the designer : the essence of design]
学生テーマ[Presentations by Design Students PQ07]
◆ ノルウェー　ナショナル&学生&建築と技術/2名と1校と2名
ナショナルテーマ[ARCTICA-shilly warmth]
◆ ニュージーランド　ナショナル&学生/16名と2校
ナショナルテーマ[Blow:An Installation of New Zealand Performance Design]　学生テーマ[Intent/Extent]
◆ パシフィックアイランド　ナショナル/1名
テーマ[Woven Flesh]
◆ ペルー　ナショナル/1名
テーマ[Longhi architecture on stage]
◆ ポーランド　ナショナル&学生&建築と技術/8名と4校と7名　ナショナル、学生テーマ共に[The Reality of Transformation/The Transformation of Reality]
◆ ポルトガル　ナショナル/1名
テーマ[Architecture on Stage]
◆ オーストリア　学生/1校　テーマ[Gravitation]

◆ ルーマニア　ナショナル＆学生＆建築と技術/1名と1校と1名　ナショナルテーマ[Dreaming with Open Eyes The Surrealist Face of the World]　学生テーマ[Expressions and Scenographic Imagery in Theatre]

◆ ロシア　ナショナル＆学生/13名と1校
ナショナルテーマ[Our Chekhov: Twenty Years Later]
学生テーマ[Works of Professor Sheincis' students]

◆ ギリシャ　ナショナル＆学生＆建築と技術/
6名と1校と1名　ナショナルテーマ[Error Erreur Erratum]
学生テーマ[Utopia by the Drama Department: Babel and The Birds]

◆ シンガポール　ナショナル/2名
テーマ [Straits Chinese Costumes]

◆ スロバキア　ナショナル＆学生＆建築と技術/
1名と1校と1名　ナショナルテーマ[Signals]
学生テーマ[Scenography as a permanent decathlon]

◆ スロベニア　ナショナル/3名
テーマ[Play of Spaces-Meta Hocevar]

◆ セルビア　ナショナル＆学生＆建築と技術/3名と7校と1名　ナショナル、学生テーマ共通[Theatre-Politics-City]

◆ スペイン　ナショナル＆学生＆建築と技術/39名と1校と1名　ナショナルテーマ[Cost of imagination]

◆ スェーデン　ナショナル＆学生＆建築と技術/4名と1校と1名　ナショナルテーマ[Scenography for the New Circus-is there a Fourth Dimension?]　学生テーマSet,Light. Costume-From Virtual worlds to actual performanc

◆ スイス　ナショナル/1名　テーマ[Going to Mean Houses]

◆ 台湾　ナショナル＆学生＆建築と技術/1名と3校と1名
ナショナルテーマ[On the Go]

◆ トルコ　ナショナル＆学生＆建築と技術/24名と3校と1名　ナショナルテーマ[From Past to Future]
学生テーマ[The Ways of Seeing]

◆ アメリカ　ナショナル＆学生＆建築と技術/95名と31校と17名　ナショナル、学生テーマ共通[New Visions, NewVoices,New Vocabulary]

◆ 英国　ナショナル＆学生＆建築と技術/17名と24校と8名　ナショナルテーマ[Collaborators: UK Design for Performance 2003-2007]　学生テーマ[TakingFlight]

◆ ベネズエラ　ナショナル/5名　テーマ [Esperanza]

◇キャンセルした国々　フランス、ボスニア・ヘルツェゴビナ

■参加リストから伺える事情

参加国の参加セクションや参加者数を調べてみると、総てのセクションに勢力的に参加している国とナショナルや学生セクションだけに参加する国と様々だ。学生セクションは著しい増加だが、実はナショナルセクションは前回より1カ国減っている。

51カ国の内、23カ国が総てのセクションに参加しているが、やはり欧米が中心だ。けれど、欧州の文化大国フランスが参加キャンセルしたり、イタリアが学生セクションだけの参加だったりと、舞台芸術の盛んな国がPQに積極的に参加する力を無くしていたのは残念なことだ。

毎回見応えのある展示をしているのは、ブラジル、カナダ、チェコ、イスラエル、オランダ、ポーランド、イギリス、アメリカなどで、総てのセクションに参加している。アメリカは今回95名もの出展者作品を2階建てブースに所狭しと展示し、ナショナルディのイベントも盛況だった。

前記の参加国、参加デザイナー数や参加校数を見るとその国の舞台芸術、あるいは舞台芸術教育の充実度が推測出来る。アメリカはナショナルセクション、学生セクションともに参加者数が最も多い国だ。参加者は舞台美術家だけでなく、ライティングデザイナー、サウンドデザイナーも多くいる。

動画作品を出展しているブースにはセットデザイナーだけでなく、ディレクターやサウンドデザイナーの協力を要するが、一方では、セットデザイナーがライティングデザイナーも兼ねているが、その例はヨーロッパ諸国では数多くみられる。

その他、セットデザイナー以外の参加者が多い国はチェコ、多岐にわたるアーティストが参加しているのは開催国ならではであろう。アイルランドもライティングデザイナーやメイクアップアーティストの参加があり、イスラエル、カナダ、ニュージーランド、スペインも多くの舞台芸術家が参加している。また、ベラルーシやブルガリア、キュプロス、リトアニア、ハンガリー、ロシア、ポーランドなどの旧共産国の多くはセットデザイナーが、コスチュームやライティングデザインも兼ねていることが判る。セットとコスチューム、あるいはセットとライティング、マスク、パペットなど人形劇の視覚的な部分総てを担当している人も少なくない。

興味深い所では、ノルウェーの参加者にSnow & Ice Scenographerと言う他では見られないデザイナーの存在があった。冬の時期だけ、氷のホテルがオープンするように、氷の劇場が存在し『ハムレット』が上演されていた。ブースには氷の玉座に座る王妃の写真が印象的で、ノルウェーオリジナルのパンフレットにもその模様が詳しく掲載されていた。

劇場建築ではブラジルがオスカー・ニーメイヤーの作品を紹介している他、ドイツはポツダム市に出来た新しい劇場を掲載。オランダも多数の劇場を紹介した。

■PQカタログと各国配布資料

各国オリジナルパンフレットは様々なかたちで配布されるのだが、学生セクションでも質の良いパンフレットを配布する所がある。1校で参加したイタリアは“Scenografia”と題し、舞台芸術部門だけのシンプルだがクオリティの高いものを置いていた。学生セクションは紙1枚を折り畳んだタイプのもの、またはポストカードタイプのものが多いのだが、ハンガリーやポーランドは20頁から50頁もある充実した小冊子を配布。他にギリシャのPeloponnese大学は、学生セクションには参加していなかったものの、Scenofestに参加し無料で配布するには贅沢な冊子を作っていた。この無料で配布されるパンフレットや資料となる印刷物、CD-Rなどを手に入れるのもPQ参加デザイナーや学生、教育関係者の大きな目的の一つになっている。沢山の資料を手に入れるだろうと、布製のトートバッグを配布するブースもあった。

日本の学生セクションは特に4大学で制作した物はなかったが、大阪芸大は大学の協力を得て無料配布するPRグッズとして、竹製の団扇に舞台美術コースのデザインを入れてPQに持ち込んだ。6月のプラハに竹製の団扇は大人気で、多くの来場者が探し求めて大変に喜ばれた。

配布した団扇と他国の配布資料

さて、PQ会場の一角に設けられるBookbrunchではPQカタログが販売され、参加者や来場者がこぞって買い求める。舞台美術関係の出版物は世界的にみても多くはないため、参加者はカタログをはじめ貴重な舞台美術関係の書籍を長い列を作って手に入れる。カタログには各国セクションの参加者リストが紹介されているが、ブースの展開と比例しているわけではない。アメリカは全セクションに参加して、カタログには参加者の名前、作品リスト、参加校のリストで最多の32頁を使用しているが、写真は劇場セクションに数点ある

だけで、写真資料は決して多くない。視覚を重要視する舞台美術の展覧会にあっては、カタログに掲載される写真や図面は大きく物を言う。今回のPQカタログで見応えのある国はフィンランド、アイルランド、リトアニア、メキシコ、オランダ、スペインなどが上げられよう。

他に興味深いと思えたところで、エストニアで上演された写真資料に黒沢明の「七人の侍」があった。降りしきる雨の中でエストニアの役者が演じる侍の写真は見てみたいと思わせるに充分な資料だ。カタログの構成はプラハのPQチームが制作していて、事前に各国写真資料を送付しているが、日本も6名のデザイナーの作品しか掲載されていない。展覧会終了後はPQカタログは貴重な資料となる。

■Scenofestコーナー

学生セクションに新たに参加した国はアイルランド、アイスランド、ベラルーシ、グルジア、メキシコ、ニュージーランド、フィリピン。前回参加して、今回不参加だった国はインド。参加校は前回から34校も増えている。学生セクションはOISTAT（the International Organisation of Scenographers, Theatre Architects and Technicians）主催のScenofestのテーマともリンクしている。Scenofestコーナーも前回は角に追いやられている感じだったが、今回は産業宮殿中央のセントラルホールで展示。

事前にScenofest側から、Aristophanes' The Birdsつまりギリシャ劇アリストパネス作の『鳥』をテーマに作品が募集されていた。Scenofestにエントリーし、センターホールに展示する学生作品もあれば、Krizik Pavilion Eでの各国学生部門で『鳥』に挑んだ作品展示をするなど、あちらこちらで様々な『鳥』のデザインを見ることが出来た。前回のScenofestでは『リア王』がテーマだったが、それ以上に今回のアリストパネスの『鳥』はセットの他に多彩な衣装展示が行われ、ワークショップも盛んに開催、前回以上にScenofestの重要性と地位を目立たせてPQ07を活気づけていた。

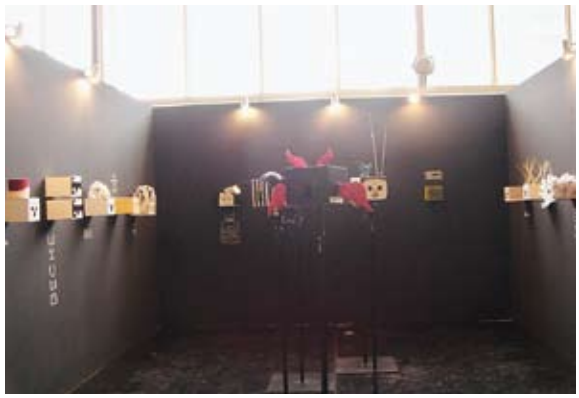
セントラルホールには展示スペース以外に段ボール箱を積み上げてScenofest劇場スペースを確保。他にバベルタワーと名付けられた鉄柱によるパフォーマンスエリア、ワークショップスペース、OISTAT建築コンペ、デジタル展示、The Beautiful Bird Wallと呼ぶ壁面には、各国舞台美術家の手書きによる『鳥』のポストカードの展示と販売など、一つのテーマに絞りながらも見応えのあるコーナーを作りあげた。

Scenofestコーナーでの模型展示、周辺には『鳥』作品がずらりと並んだ。

Scenofestコーナーの一角、椅子に座ってモニターを見ると、まるで『鳥』のマスクを着けたように見える仕掛けだ。

■ 各国学生ブースから

イタリア　良質の衣装展示と模型作品など、伝統を感じさせる作品が見られた。ミラノの学校1校の参加で、教員一人と数名の学生達だけで展示作業していた。



トルコ　四角い箱には目鼻があって、中をのぞくと戯曲の世界。

イスラエル　5校が参加。一目で「星の王子様」と判る模型作品。前回、前々回とテルアビル大学の大掛かりな模型が展示されていたのが印象に残っているが、今回は見当たらなかった。

アメリカ学生ブースの一部。
アメリカは参加校が最多の31校であったが、ブースの3面をクローゼット風に収納し、引き出しや小さな扉を開けるとぎっしりスケッチや舞台写真、模型やモニターまで様々な作品を収納展示。ブース上部にも衣装の数々、それでいてブースには余白的な空間が残され、学生によるパフォーマンスが上演されていた。パフォーマンスを上演している時、ブースの3面のクローゼットはミラースクリーンになって、映像が映し出されるなど、狭い空間をうまく使用していた。

チリ　1校の参加、Reversibleと言うテーマで宗教的な雰囲気を感じさせるオブジェを作り上げた。

ポーランド　4つの大学が参加、まとまりのあるThe Transformation of Realityのテーマで密室を作っていた。予算をかけた体験型ブースだったが、学生個々の作品レベルは掴めなかった。配布パンフレットは上質で、各大学の日頃の取り組み、学生個人の作品などが詳しく掲載されていた。

ニュージーランド　1校の参加。

リトアニア　パペットが多数、ブース中央に置かれたテーブルには学生達のスケッチブックやデザインノートなど、気取らない作品が手に取って見ることが出来た。1校だけの参加。

ラトビアは小説家Mikhail Bulgakovの作品に絞って、クオリティの高い模型を多数出展。これもその一つ登場人物までよく出来ている。1校の参加だが、力作揃いで、その一人の作品はゴールドメダルを獲得した。

スペイン　前回はスタイリッシュな展示だったが、今回は手作り感いっぱいの展示だった。1校の参加。

ブルガリア　地味ながら、毎回質の高い作品を見せている。首都ソフィアにある国立芸術大学1校の参加だ。

スェーデン　セットデザインだけでなく、コスチューム、マスク、ライティング、サウンド、テクニカルを学ぶ学生達が参加。実際に大学で上演された写真や毛糸で編まれた着ぐるみの衣装展示など、学生らしいオーソドックスな展示であった。1校の参加。

チェコ　3校の参加、床や壁に模型や作品が埋め込まれて展示。隣のエリアでは学生のパフォーマンス上演。

フィンランド　1校の参加、テーマはForest。ジョーゼット幕でブースを囲み、学生達だけでのんびり制作していた。

オーストリア　学生セクションにだけ1校で参加。テーマはGravitation。ブースは、大きな円柱で、そこに階段を登って入ると、天井にご覧のようなテーブルセットが逆さに飾られ、滑り台で滑って出口に。オペラやオペレッタが盛んに上演されている国でありながら、ナショナルセクションの参加は前回もなかった。これは何を意味するのか？大掛かりな湖上舞台公演もあるオーストリアだが、その舞台美術を担当するのはオーストリア人でなく、欧米の他国のデザイナーを招いていることが多い。

アイルランド　8校の参加。模型作品以外にパペット作品が沢山展示されていた。セノグラフィを学ぶ学校だけでなく、ファインアート系の参加もある。

ベルギー　前回同様ブース全体が仕掛けものになっていた。参加6校の作品を円筒の内側に貼って展示、来場者はそれを手で廻して作品を見ることが出来る。平面作品に拘った展示で、作品を見る事以外にも大きな円筒を廻す楽しさで来場者を楽しませていた。

ルーマニアの模型作品、この装置は実際上演もされているようだ。国立芸術大学1校の参加だが、学科はステージデザインの他、デコラティブアーツやデザイン科が参加している。

メキシコ　ご覧のように平面プリントで作品展開。1校の参加。

ロシア　Studio-School at Moscow Art Theatre1校が参加。壁面、床と余す所なく展示、そのスケッチの数々は創作過程が良く判る優れたもので、近年は模型展示が多い中、絵画表現の重要性を再認識させてくれた。模型作品も大きく、来場者の眼を釘付けにしていた。カタログによるとその作品はわずか3名の学生のものだった。

ロシア　力強い模型作品、奥の階段装置は「ガリレオの生涯」

イギリスはいつもと違う取り組みで時間をかけて仕込みをしていたが、内容は詳しくは伝わらなかった。24校も参加していたのだが、、、。

ブラジル　カーニバルの山車の模型。真っ赤で大きな箱はマップケース風に仕立てられ、幅の広い引き出しに参加校6校の学生達のデザイン画がぎっしり。ブラジルのブースには勢いがある。

台湾　3校の参加、衣装も模型も力作揃いだった。

ハンガリー　1校ステージ＆コスチュームデザイン学科の参加。テーマは “Romeo& Juliet in Bagdad” ブースは落書きいっぱいだが、配布パンフレットは60頁もある立派な小冊子。個々の学生の作品はこの小冊子で見て頂こうという主旨だろう。

ギリシャのブースは1校でオープンな展開だったが、ご当地の大作家アリストパネスの『鳥』に取り組んだ作品が多数。実物大の衣装や模型、デザイン画、どれも学生の域を超えるクオリティだった。上記作品はユニセフの賞を獲得。

ギリシャ　学生ブースの衣装展示、アリストパネスの『鳥』

オーストラリア　1校の参加。3壁面と床にスケッチの数々、上演写真も多数展示。配布資料はCDケースに入っていて、カレンダー形式になっていた。参加した学生の顔写真や上演写真が記録されている。

デンマーク　2校の参加。レスキュー隊の衣装を着て、ブース作り。前回同様、特にこれと言ったスケッチも模型作品も展示はされていないが、体験参加することに意味がある。

フィリピン　初めてのPQ、とにかく参加することから始まる。

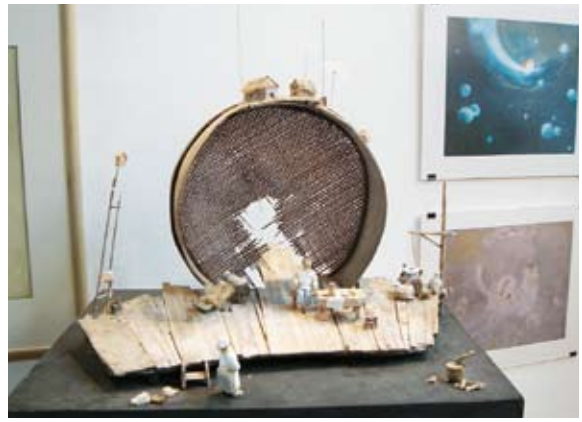
日本の学生ブース入り口　大阪芸術大学、玉川大学、多摩美術大学、武蔵野美術大学はレギュラー参加校だ。ファサードは関係者の間で物議をもたらした。（武蔵野美大の制作）テーマはナショナルセクションと同様、”KAWII”SCENOGRAPHY as Vernacular Pop

大阪芸大学外公演の衣装展示。

エストニア　1校の参加は手術台をイメージしている。点滴を受けているのはフール、つまり道化の小さな人形だった。テーマはReanimographyという造語だが、元気づける舞台装置と言ったところだろうか？　渡航した学生達には今ひとつ理解されていなかった。

香港　1校の参加だがパフォーミングアーツとエンターテイメントアーツなどの学科が参加している。至る所に上演作品の数々。熱気はあったが、どこからどう見て良いか、来場者は少々戸惑いがちだ。

ベラルーシ　1校の参加。ベラルーシは99年以来の参加だったが、99年同様に独特のオブジェ的模型作りで見応えがあった。ベラルーシスタイルとも呼べそうな既存の農機具などを利用しての作品展開だが、実際に上演した写真等は見当たらなかった。古道具等を利用した模型は99年のPQでも目を惹いたが、オブジェ化を優先させる傾向にあるようだ。



ベラルーシ独特の模型作品

我が校は1回生から4回生までの優秀作品を持ち込んだが、基本的には世界的に有名な戯曲やオペラに取り組んだ。3回生はチェコの人気作家カレル・チャペックの『ロボット』を競作展示した。作品の前にノートを置いて、来場者に意見を書いてもらう学生もいて、異国の貴重な意見を手にした。

PQ07の学生セクションに参加するにあたり、PQ実行委員会では前記の4大学以外にも、演劇や舞台美術に取り組んでいる大学に参加を呼びかけた。関西圏でも大阪芸大以外に4校に参加依頼書を郵送したが、指導教員がPQ学生セクションの実情を把握出来ていなかったり、海外へ出展するにはまだ力不足で次回には参加したいなどの返答で、結局のところ前回同様の大阪芸術大学、玉川大学、多摩美術大学、武蔵野美術大学となった。

参加4大学の指導教員はPQ実行委員会でも数回会議を持ち、今回初めて渡航前に仮展示を武蔵野美大で行った。武蔵野美大は演劇美術に取り組んでいないの

で、今回はブースのファサードとキャラクターオブジェを制作した。

各国の学生ブース、参加校数と内容を振り返ると、1校だけの参加ブースは当然のことながら展示内容はまとまり易く、その学校の校風または指導教員のスタイルがよく伺える。ラトビアやベラルーシ、ロシア、ブルガリア、ルーマニアなど旧共産主義国がそれだ。ハンガリーやポーランドは展示では学生個人の作品レベルを伺い知る事が出来なかったが、配布パンフレットでそれを補っていた。展示と配付資料の両輪で参加して、諸外国にその存在をアピールする方法だ。

私たちは各国の学生ブースを見て、デザイン画や模型の出来に感心するだけではなく、その考え方や取り組み方、教育を展示から学び取ろうとする。そこには単に造形的なものの展示だけではなく、演劇に対する考え方や上演方法、各国の文化と舞台芸術の可能性と展望が潜んでいる。

■ナショナルセクション

ナショナルセクションは学生セクションを産業宮殿から移動させたことにより、前回より余裕あるブース作りを展開、バーやバッフェも常設されていた。最も広いブースは地元チェコ、最も小さなブースはペルーだった。前回同様、香港は中国としてではなく、香港地域として参加。

ナショナルセクションでは、デザイン画も模型作品も展示しない国が多数あり、今回韓国はいくつもの液晶テレビを置いて上演作品を見せていたが、それは何だかテレビの新商品を展示している感じで活気は感じられなかった。舞台作品を映像で見せることの難しさだ。

一方、エストニアはブースをしっかり箱形にした中で、大きなスクリーンを3分割して上演作品を映像化して見せていたのが、非常に興味深い作品だった。上演会場も衣装も型にはまらない面白さで、その芝居を観たような気にさせる力があった。それはイナー、Ene-Liissemperがセット、コスチューム、ライティング、サウンド、マスクデザインとこなしている作品一つに絞ったブースだ。日本ブースとしてはあり得ない展開だろう。このように各国の舞台美術家組織の事情で、参加人数も展示内容も様々になる。今回メキシコは衣装展示を中心に行い、仕込みはオープニングに間に合わなかったが、迫力のある衣装の数々でコスチューム部門のゴールドメダルを受賞した。

ナショナルブース、日本の展示。回転寿司屋のカウンターに作品が乗っている。テーマは“KAWAII”SCENOGRAPHY as Vernacular Pop

ナショナル台湾ブース。仕込みに3～4日をかけて職人が編み上げた2階建てブースは会場にアジアの風を吹き込んだ。衣装あり、マスクあり、模型ありと、前回同様PQへの意気込みの強さが感じられるブースだった。伝統とモダンの融合、ゴールドメダルを獲得した。

ナショナルセクション　ニュージーランド　白いエア入りの柱にはモニターや作品が収蔵されて、インパクトのある空間作りに成功していた。

ナショナルセクション　ロシア　床は水浸し、来場者はゴムのオーバーシューズを掃いてブースに入る。異色のブース展開とクオリティの高い作品展開で見事、最優秀賞のゴールデントリガを受賞。

■コンペティションの結果

◇ GOLDEN TRIGA for the Best Presentation of a Theme: RUSSIA

◇Gold Medal for Best Use of Technology: TAIWAN

◇Gold Medal for Best Use of Technology: BORIS KUDLIČKA（SLOVAKIA）

◇ Honorary Diploma in the Section of Architecture and Technology: SPAIN

◇ Gold Medal for the Most Promising Talent in the Student Section - Scenofest: REINIS SUHANOVS（LATVIA）
- for its wit and simplicity

◇ Gold Medal for Best Exposition in the Student Section and Scenofest: LATVIA

◇ Gold Medal for Best Realization of a Production:JOHANNES SCHÜTZ （scenography and costume design）,
JÜRGEN GOSCH （direction）William Shakespeare: Macbeth, Düsseldorf Schauspielhaus, 2005, Germany

◇ Gold Medal for Best Realization of a Production:BRETT BAILEY （designer and director）
Oscar van Woensel: medEia, Republic of South Africa

◇ Gold Medal for Best Theatre Costume:
MEXICO- for the vast array of approaches to adorning the performing body

◇ Gold Medal for Best Stage Design:
JOAO MENDES RIBEIRO （PORTUGAL）- awarded to an architect who truly understands theatrical space

◆ UNESCO PRIZE FOR THE PROMOTION OF THE ARTS - PERFORMING ARTS SECTION
Department of Theatre, Faculty of Arts, University of Chile, Chile
Theatre Faculty of Academy of Performing Arts in Prague, Czech Republic
Eliza Alexandropoulou, Greece
School Exhibit of Republic of Korea
Ana Milic and SnezanaVeljkovioc, Serbia

■ まとめ

日本のPQの窓口は舞台美術家協会になっているが、もっと幅広く舞台に関わる人たちに知ってもらい参加して頂くためにはPRも重要だ。今回は朝日新聞の編集委員山口宏子さんにも渡航して頂き、新聞にも掲載された。一度、PQを体験するとその規模やパワフルな会場の雰囲気をまた味わいたくなって、出展していなくても毎回参加する協会員やテレビ関係者、大学教員など、リピーターが多いのもPQの特徴だろう。

舞台芸術学科でも関わっているのは舞台美術コースだけだが、実のところPQではライティングやサウン

ド、パフォーマンスの実験的な発表も盛んで、舞台美術コース以外の学生達や教員が参加しても充分な値打ちがあるはずだ。ただ、残念なのは6月中旬というPQ開催期間が日本においては平常授業期間であるために、PQ期間を存分に体験することが出来ない事情がある。それでも今回、私たちは仕込みを行いオープンして3～4日後には帰国、またはその逆で搬出をする日程にあわせて、展覧会場に入ってくれた協会員や玉川大学など、実行委員会は良くまとめあげた。

日本は“KAWAII”と言う世界的に通用する日本語をテーマに取り組んだが、舞台美術家協会員から参加を募り、PQ実行委員会で公平な審査を行った結果12名の作品が選ばれた。その中には大阪芸術大学教員の大田創、加藤登美子の他、OBの橋本尚子らの作品があった。また実行委員にも大阪芸大OBが数名参加し活躍してくれた。彼らは8年前のPQ99で一緒に渡航したメンバーでもある。かつて学生時代にPQを体験していたことが、実行委員として役立った事は喜ばしい。

毎回展示ブースのデザインや出品作品は変わるが、演劇の創られ方は変わらない。コンセプトによって劇空間のデザインは変わるが、そこはやはり役者やダンサーが演じる空間でなければならない事に変わりはない。毎回デジタル化が進み、液晶モニターで作品を見せるところも多かったが、すでに新鮮味はない。デジタル画像でみる作品よりも、実物の衣装であったり、精巧な模型作品に惹かれるのは私だけだろうか？もちろん、デジタル化して情報を沢山流すことも重要ではあるのだが。

■おわりに

毎回増大し続けるPQを体験するのは実に刺激的だ。だが、おそらくは初めて見るPQに最も強い衝撃と印象を受けるはずだと、何度かPQに参加している協会員と話し合った。渡航した学生達はその作品数と大胆さと、情報量の多さにオーバーヒート気味だった。今回大阪芸大は4大学の中で上演衣装など最も多くの作品を持ち込んで、その意気込みをアピール出来た。

武蔵野美大での仮展示でも学生有志が多く参加し、現地仕込みも心強いものがあった。毎日のプログラムが多すぎて総てを体験出来ないのが残念だが、それでもPQに参加出来た者は幸運だ。可能ならば、全期間滞在し展覧会だけではなくレクチャーやライヴなどを体験してみたいものだ。

次回2011PQに向けて舞台美術家協会では静かに準備を始めている。参加するだけでなく、賞も狙える展示内容を目指すべきだろう。学生セクションも個々の大学の取り組み方が違うが、参加校の多いアメリカやブラジルを参考に展示方法を考え直す必要があると実感した。

最後に日本の学生セクションのまとめ役を買って出て下さった日本舞台美術家協会事務局の斎藤浩樹さんにこの場を借りて感謝申し上げます。また、出展に際し理事長はじめ教務課のご理解により、PQ出展料や配布資料など多くを支援して下さった塚本学院、大学関係者に深謝申し上げます。

尚、本稿は塚本学院教育研究補助費による成果報告を加筆したものである。

この原稿を校正中にチェコのPQチームより、悲しいニュースが届いた。我々が慣れ親しんでいるPQ会場である産業宮殿の左翼（正面左側建築）が10月16日夜、火災で焼け落ちた。足を運んだことのある多くの舞台美術家や関係者にはショックな出来事だが、2009年2月に公布される予定のPQ11参加募集は計画通りだという。

参考文献
PQ07公式カタログ
PQ03公式カタログ
A MIRROR OF WORLD THEATRE
A MIRROR OF WORLD THEATRE Ⅱ
http://www.pq.cz/
他、各国配布資料